

(講演資料)

「洛中洛外図屏風」から見えてくる歴史

令和5年(2023)11月24日

岡山歴史研究会運営委員 井上 知明

1 洛中洛外図屏風とは

室町時代に成立した、京都とその周辺の景観、町並、風俗を描いた屏風。右隻と左隻の二つの屏風から成り、両方で「一双」と言う。右隻には主に京都の東側が、左隻には主に京都の西側が描かれている。右隻には主に下京が、左隻には主に上京が描かれていたことから、右隻を下京隻、左隻を上京隻とも言う。

各隻を正面から見た時に、右から順に一扇、二扇・・・と言ひ、六扇(六画面)のものが多し。各六画面の右隻、左隻を全体で「六曲一双」と言う。

160以上の作品が現存しているが、江戸時代のものがほとんどで古いものは少ない。

初期の作品には、一部乱れはあるものの、季節の移ろいが描かれている。これは、古来の四季絵(月次絵)の伝統を継承したものの。

秋	秋	秋	冬	冬	冬	春	春	春	夏	夏	夏
7月	8月	9月	10月	11月	12月	正月	2月	3月	4月	5月	6月
六扇	五扇	四扇	三扇	二扇	一扇	六扇	五扇	四扇	三扇	二扇	一扇

左隻
(主に京都の西側)

右隻
(主に京都の東側)

基本的には、南北の通りは左右に平行に、東西の通りは画面の右上から左下(順勝手)又は左上から右下(逆勝手)に描かれている。

すべてが写実ではなく、あるべき京を想定して描いているところがあり、必ずしも特定の時点の京都を描いたものではない(異時同図)。また、しばしば粉本が使われているため、描かれた建物などが実態とは異なっていることもある。絵空事という言葉があることに十分留意すべき。

従って、制作年代を決定するのは難しいが、少なくとも文献等で建立された年がはっきりしている建造物が描かれていれば、制作年代はそれ以降であることが

わかる（制作年代の上限）。逆に、ある時点で無くなったり移転した建物が元の場所に描かれていれば、その時点より前に制作されたものと考えられる（制作年代の下限）。しかし、意図的な異時同図の場合や、粉本を用いて描かれた場合などは判断が難しい。

その作品の描き方（作風）や人物の服装なども年代特定に役立つ。

金泥や金箔で雲や霞、あるいは地面が表現されている。スペースの制限があるため省略が多く、ある事物が描かれていないからといってそれがなかったとは断言できない。逆に言えば、選ばれて描かれているものには、程度の差はあれ何かの意味があるとも言える。

作品のすべての部分を一人の絵師が描いたわけではなく、工房による制作と考えるべき。従って、同じ作品中でも作風が微妙に異なっていることがある。

ふだん京都に行けない人が都である京都を見たいという需要のもとに、制作された作品が多いのではないかと考えられる。江戸時代には、上流階級の嫁入り道具の一つになったことも多かったようである。

2 洛中洛外図屏風の誕生

『晴富宿禰記』 文明11年（1479）7月3日

内裏の修理が行われた際の修理奉行からの公家宛書簡

「洛中図、私所持候を、其へ被進候由承候、御ゑらみ候いておかれ候へく候」

洛中図という言葉が出てくる最古の文献。「そちらでお選びになっておいて下さい」という内容から、屏風ではなく組になった扇面図又は画帖ではないかとされる。

『実隆公記』（三条西実隆の日記） 永正3年（1506）12月22日

「甘露寺中納言来、越前朝倉屏風新調、一双画京中、土佐形部大輔新図、尤珍重之物也、一見有興」

「甘露寺元長が来て言うには、越前の朝倉貞景が（宮廷絵所^{えどころあずかり}預であり室町幕府の御用絵師でもあった）土佐光信に京都の景色を描いた一双の屏風を描かせた。新図であり、珍しい物でとても興味を引かれた」

この新図の屏風こそが、最初の洛中洛外図ではないかと言われている。

3 初期洛中洛外図

現存している作品で、景観が室町時代に遡るとされる古いものとして以下の4

作品があり、初期洛中洛外図と言われている。
(屏風であるが、作品名としては〇〇本と言う。)

・歴博甲本（町田本、三条本）

国立歴史民俗博物館蔵、重要文化財。

左右両隻とも高さ138センチメートル、横343センチメートル。

現存している最古の洛中洛外図であり、三条西家の本家にあたる三条家に伝わったもの。

右隻二扇の中段付近が大きく欠損しており、稚拙な修復の跡がある。

東西の通りは逆勝手に描かれている。

建物名や地名を書いた短冊形の貼り札が64枚貼られている。

中心をなす建造物として、右隻の内裏と左隻の幕府が対比的に描かれており、これは、上杉本、歴博乙本にも共通している。

応仁の乱後の復興した京都を描いたもので、天文5年（1536）に起きた天文法華の乱以前の景観が見られる。

登場人物1426人。

天文法華の乱

1532年に一向一揆が畿内に波及したとき、細川晴元は法華宗（日蓮宗）徒を利用して山科本願寺を焼き討ちしたが、これを契機に法華宗徒は自治権を拡大し、延暦寺とも対立した。天文5年、宗論で破れた延暦寺の宗徒が京都の法華宗徒を襲撃し、21箇寺を放火炎上させた。これを天文法華の乱と言い、その後数年間法華宗は洛中で禁教の状態に置かれた。

画風は穏やかで古風であり、品がある。基本的にはやまと絵風であるが、山や樹木の描法に漢画の趣があり、武田恒夫氏は、土佐派系というよりむしろ漢画系の画家で、やまと絵の手法にも熟達していた人の筆によるものとした。土佐光信周辺の絵師説もあるが、狩野元信周辺の絵師説の方が有力。

この当時の京都は、二条大路を境に南側が庶民が住む下京、北側が支配階級が住む上京になっていたが、応仁の乱や火災などで周辺の市街地はさびれており、上京と下京を結ぶ道は室町通だけであった。

左隻の細川邸、典厩邸（細川氏の分家）が幕府と並んで一直線に目立つように描かれ、細川の天下を象徴しているように見える。

小島道裕氏によれば、大永5年（1525）に当時の最高権力者である細川高国が、12代将軍義晴に嫁ぐ三条家の息女のために、狩野元信に命じて描かせた作品である（現在の有力な学説）。

最近、小谷量子氏が新説を提出した。歴博甲本は足利義晴が天文12年（1543）に土佐光茂（光信の子）に描かせた作品で、11代将軍足利義澄（義晴の父）と細川高国の鎮魂のために制作させたとする。小谷氏は、歴博甲本は都市図であるばかりでなく、四季絵・名所絵でもあり、和歌・物語を主題とするやまと絵の伝

統を継承した作品だとする。甲本にはあちこちに不自然な図様があり、これらは歌絵として意味を特定できるとしている。

・東博模本

東京国立博物館蔵。

江戸時代前期に狩野派により模写されたもので、右隻五扇が欠失。

原本は伝わっていないが、歴博甲本と上杉本の間時点頃の制作とされる。

原本の作者は狩野元信周辺とみられ、細川晴元関係からの依頼か。(阿波細川家出身の細川澄元は高国に敗れ阿波に戻ったが、高国の没落後、澄元の子の晴元が政権の座についた。)

将軍御所(晴元が義晴のために造った今出川御所)が右隻六扇に描かれ、左隻六扇に讃州の館(阿波細川氏の京屋敷)と讃州寺が描かれている。

・上杉本

米沢市上杉博物館蔵、国宝。

左右両隻とも高さ160.5センチメートル、横365センチメートル。

永禄8年(1565)、狩野永徳(州信、一説に重信)の制作とされる。

保存状態が良く、最も絢爛豪華で美しい。

狩野永徳の壺型印(州信)が押されている。

東西の通りは順勝手に描かれ、235箇所建物名や地名が書かれている。

画面は躍動感にあふれ、永徳の力量が余すところなく発揮されている。

登場人物2485人。

狩野永徳(1543-1590)

桃山時代を代表する絵師。祖父は狩野元信。織田信長に認められ、安土城の天守や御殿の障壁画を制作。後に豊臣秀吉にも重用され、大阪城や聚楽第などの障壁画を制作。作品のほとんどは失われたが、大徳寺聚光院の襖絵(花鳥図、琴棋書画図)や上杉本洛中洛外図、唐獅子図など、筆力の強さと動感に富む作品は、その天才を表している。

古くから狩野永徳作であるとされてきたが、昭和59年(1984)に今谷明氏が、建築物の年代比定などから景観年代が天文16年(1547)であるとして、当時永徳は5歳であったから永徳の制作ではないとの説を提出し、大論争があった。しかし、左隻三扇の中段下部に出てくる三好邸(三好筑前)に、永禄4年(1561)に13代将軍義輝の御成があった際に造られた冠木門があるなど、年代比定に間違いが散見され、今谷氏の説は否定された。画風などを含めた美術史の立場からも、永徳の作品であることを疑う人はいない。

小島道裕氏によれば、上杉本は政治的な事物については細川晴元が政権を握っていた当時のまを描いているという。そう考えると、今谷氏の景観年代比定とも整合性が出てくる。

瀬田勝哉氏は、上杉本は公方を要に、現実には緊張をはらんだ細川・三好・松

永等の対立する諸政治勢力を円満な構図の中に収めた作品であり、將軍義輝が、亡命中に近江穴太に没し生きて京に戻れなかった父義晴（12代將軍）の追善法要のために作らせたものではないかとした。

黒田日出男氏は、もともと義輝が上杉謙信に与えるために発注したものとし、義輝は完成前（永禄8年5月19日）に三好・松永により非業の死を遂げたが、永徳は永禄8年9月に屏風を完成させ、それを見いだした織田信長が天正2年（1574）に上杉謙信に贈ったとした。（現在の定説）

『上杉年譜』（謙信公御年譜）十七 元禄9年（1696）

「天正二年春三月下旬、織田信長ヨリ使節到来ス、濃彩ノ屏風二双贈ラル、一双ハ洛陽ノ名所、一双ハ源氏ヲ画ク、狩野源四郎貞信筆也、墨妙精工ニシテ、見者目ヲ驚カス、管領モ弥信長ノ深情ヲ感シ給フ」

（永徳の名前が貞信になっている。管領は謙信のこと。）

『北越軍記』 寛永20年（1643）の序があるが、延宝（1673-81）頃の作か

「天正二年 甲戌 四十五歳、三月、信長公ヨリ兩使ヲ以テ、洛中洛外ノ図ノ屏風一双、源氏物語ノ屏風一双、何レモ狩野永徳筆極彩色ナリ、是ヲ謙信へ進入、事ノ外ノ懇志ナリ、然レトモ色々（マツ）ヲ以テ、上杉領内へ手遣有ニ付、謙信書札ヲ遣シ、信長表裏アル事ヲ讓、手切之旨被申遣、信長ハ、誰人カ讒言ニテ可有之旨、様々陳謝アリ、謙信不用」

『御書集』（謙信公御書集）18世紀中頃（？）に平田範（のりすみ） 偶筆写、天正2年の記事

「同年三月、尾州織田信長、為使介佐々市兵衛遣于越府、被贈屏風一双、画工狩野源四郎貞信、入道永徳齋永禄八年九月三日画之、花洛尽、被及書札」

（黒田日出男氏は、この史料が『上杉年譜』の元になった史料だとした。）

他の洛中洛外図にはない、花の御所に向かう貴人の行列が描かれている。貴人は細川晴元ではないかという説があったが、黒田日出男氏は上杉謙信ではないかとした。実際にはそのようなことはなかったが、謙信が管領として將軍義輝のもとにやって来るといふ義輝の願望を表したものだとしている。

小谷量子氏は、上杉本は義晴正室の慶寿院（近衛尚通の娘）により永禄9年の義晴十七回忌のために発注されたもので、『穴太記』という義晴の追善記と主要図像が一致しているとする。行列の貴人は將軍義晴であり、天文18年（1549）に都から近江へ退去する際の行列を表しているという。

・ 歴博乙本（高橋本）

国立歴史民俗博物館蔵、重要文化財。

1580年代の制作か（当初は上杉本より古いのではないかとされていた）。

狩野松栄（永徳の父）あるいは狩野宗秀（永徳の弟）の工房の制作とされる。

上杉本に類似したところがあり、上杉本の影響を受けているが、政治的な主題を中心にした作品とは考えにくい。

4 第二定型洛中洛外図

江戸時代に入ってからのものである。

右隻に内裏と方広寺大仏殿、左隻に二条城を配置。

(なお、初期洛中洛外図と第二定型洛中洛外図との間に位置するものとして、「聚楽第図屏風」がある。)

方広寺

天正14年(1586)、豊臣秀吉の発願により着工。大仏殿に大仏を安置したが、慶長元年(1596)の大地震で崩壊。徳川家康が豊臣秀頼に再建を勧め、慶長19年(1614)に竣工。しかし、巨鐘銘文の「国家安康君臣豊楽」が大坂冬の陣の発端となった。

二条城

慶長8年(1603)に完成。後水尾天皇の寛永行幸(後述)の前に、廃城となった伏見城の天守を移築。それまでの天守は淀城へ移された。

・京博A本(山岡本)

第二定型洛中洛外図のオリジナルと思われるが、左隻しか残っていない。狩野光信(永徳の長男)周辺の制作か。

・勝興寺本

富山・勝興寺に伝わるもので、重要文化財。

京博A本とほぼ同じ構図であり、作者は狩野光信あるいは弟の孝信あたりか。寺伝では、鷹司関白准後の息女が勝興寺第20代摂常に嫁いだときの持参品とされる。

慶長20年(1615)の祇園会の神輿の二条城前渡御が描かれている。

祇園会神輿の二条城前渡御

祇園会の神輿が二条城前に渡御したのは、大阪夏の陣の終わった慶長20年6月であり、このとき家康が二条城に滞在していた。翌7月に元和に改元されたため、神輿の二条城前渡御が描かれるのは元和以降の作品と言える。

・舟木本

東京国立博物館蔵、国宝(洛中洛外図の国宝は上杉本と本作品のみ)。

戦後発見されたもので、滋賀・長浜の医師舟木氏が彦根で入手したもの。

景観年代は概ね慶長末頃か。

初期洛中洛外図とは異なり、上京の中心部から東西を見るのではなく、京都の

南側（東寺の五重塔？）から北側を俯瞰する構図になっており、左右隻が横に連続するように描かれている。

方広寺大仏殿が大きく描かれている。

都市風俗を中心に描いた活気とバイオレンスに満ちた屏風で、歌舞伎・人形浄瑠璃の舞台などの盛況が描かれるほか、六条三筋町の遊廓が大きく描かれる。

作者は、画風から岩佐又兵衛（荒木村重の子）ではないかとされる。

・林原美術館本（池田本）

林原美術館蔵、重要文化財。

元和年間（1615-1624）の作品と思われる。

左右両隻とも縦159センチメートル、横363センチメートル。

江戸時代の優品であり、岡山藩主の池田家に伝わったものであるが、由来は不明。徳川秀忠の養女勝子（千姫と本多忠刻の長女）が、池田光政に興入れした際の嫁入り道具という説がある。

慶長20年（1615）の祇園会の神輿の二条城前渡御と、元和6年（1620）の東福門院（徳川和子）の入内行列が同時に描かれるなど、同時代性にはこだわっていない。

二条城の近くには、徳川権力を表す所司代屋敷も描かれている。

寛永元年（1624）にはほぼ取り壊しの終わった伏見城が描かれている。

内裏の建物の中に城郭の櫓のようなものがある。徳川和子の御所と思われ、内裏の中に幕府権力を象徴する建物があったことになる。

東西の通りの基本は逆勝手。一部ジグザグになっているところがある。地理的な正確さよりも、町や街路の様子をより詳しく描こうとしたものとされる。

登場人物約3100人、洛中洛外図屏風で最多。

保存状態は良好で、町の賑わいが華やかに描かれており、四条河原や糺の河原での歌舞伎や、六条三筋町遊郭なども描かれる。

顔が丸っこく、人物の描き方に特徴がある。

土佐派の絵師の作品という説もあるが、狩野派や土佐派とは異なる町絵師の工房の制作と思われる。同じ工房の作品として、島根県美本、岐阜歴博本、大阪城天守閣本、京博B本、パーク氏所蔵本など多数の作品あり。

・サントリー美術館本

寛永3年（1626）の後水尾天皇二条城行幸を描いている。この行幸は都の貴賤に大きな印象を残したらしく、これ以降の作品には、制作時期にかかわらず左隻にこの行幸を描いているものが多い。

寛永末頃の制作か。

・住吉具慶本

土佐派出身の住吉如慶の長男の具慶（1631-1705）による作品。

この工房による他の作品も多数残っている。

18世紀になると、新たな要素を描き込む（アップデート）ということがなくなり、内容が固定化して名所絵としての性格が強くなり、作品としての魅力には欠けるようになった。

5 洛中洛外図に描かれているもの

洛中洛外図には寺社、名所旧跡、公家や武家の屋敷、山川などの自然景観、都市風俗や季節ごとの行事、さまざまな職業の人々などが多数描き込まれている。以下に取り上げたのはごく一部だけである。

・内裏、將軍御所、細川邸（京兆^{けいちよう}、典厩）（初期洛中洛外図）

権力、権威を象徴するものとして描かれている。

内裏は天皇、將軍御所は足利將軍の住まい。細川氏は歴博甲本及び東博模本の原本当時の実質最高権力者。細川京兆家は室町幕府三管領家の一つであるが、上杉本の頃には細川氏はすでに没落していた。

京兆と典厩

京兆は細川本家で、代々右京大夫^{うきょうのだいぶ}を名乗り、唐名で京兆と呼ばれた。

典厩は細川家の分家で右馬頭^{めりよう}を名乗り、馬寮^{めりよう}の唐名の典厩と呼ばれた。

歴博甲本、上杉本当時の内裏は平安京の内裏ではなく、土御門内裏（公家の土御門家を利用した臨時の里内裏）である。今の京都御所の真ん中あたりになるが、方一町ほどの広さに過ぎず、両本ともに内裏の近くには耕作地が描かれている。

『宗長手記』連歌師宗長の日記 大永6年（1526）

「京を見はたし侍れば、上下の家、むかしの十が一もなし。只、民屋の耕作業の躰、内裏は五月の麦の中、あさましとも、申にもあまりあるべし」

歴博甲本の將軍御所は花の御所ではなく、大永5年に細川高国が自らが擁立した將軍足利義晴のために造った柳原御所（柳の御所）とされる。

東博模本の將軍御所は、細川晴元が造った今出川御所（前述）。

上杉本の將軍御所は花の御所の位置にあるが、上杉本が制作されたとされる永禄8年（1565年）には、花の御所の位置に幕府は存在していない。花の御所を最初に造ったのは足利義満であるが、上杉本に描かれているのはもちろん義満の時の御所ではなく、義政の時代の花の御所が、過去の理想化された姿としての將軍御所として、粉本をもとに描かれたものとされている。（義輝の父義晴の今出川御所を描いたとする説もある。）

歴博甲本、上杉本では、内裏と將軍御所のみ「内裏様」、「公方様」と「様」の

敬称が付けられている(歴博甲本はひらがな表記)。他の公家や武家の邸宅は「殿」か敬称無しになっている。当時、「様」が最上級の敬語であったことがわかるし、実権がほとんどなくても、天皇と将軍が二大権威として認識されていたことが理解できる。

・内裏、方広寺、二条城(第二定型洛中洛外図)

林原美術館本など第二定型洛中洛外図には、左隻に必ず徳川の権力を表す二条城が描かれているが、それに対するものとして、右隻に内裏とともに豊臣を表す方広寺大仏殿も描かれている。方広寺が京都の景観を描く場合に欠かせないものになっていたことがわかる。

また、林原美術館本では内裏が、初期洛中洛外図の時代とは異なり「たいり殿」と表記されている。

・近衛邸

藤原氏北家の嫡流で、五摂家の筆頭。歴博甲本では左隻三扇下段に描かれるが、甲本の時期には本宅ではなく別邸が使われており、描かれているのも別邸である。左隻三扇は季節的には冬の景観が描かれるべきところだが、庭には桜が咲いている。これは、近衛邸が桜御所と呼ばれ、糸桜(枝垂れ桜)が有名であったのでそう描かざるを得なかったということであろう。

上杉本では左隻四扇(本来の季節としては秋)に描かれるが、庭には同じく糸桜が描かれている。両本ともに季節の乱れが生じている。

・二条邸

五摂家の一つで、庭園が大変有名であった。歴博甲本では右隻三扇中段に描かれる。上杉本では右隻五扇中段に描かれるが、庭園の位置が北側に描かれ、間違っている。小島道祐氏は、本来左隻にあった花の御所の粉本を利用したのではないかとし、さらに、上杉本の二条邸は源氏絵の世界のように描かれているが、人物が宮内庁三の丸尚蔵館所蔵の源氏物語図屏風(伝永徳筆)の登場人物に似ているとしている。

後に織田信長は二条邸を^{きんぷと}接收して壮麗な屋敷を造ったが、完成後の天正7年(1579)に正親町天皇の皇子誠仁親王に献上している(二条御所)。

・畠山邸と畠山^{すし}の辻子

畠山は三管領家の一つであるが、応仁の乱後は勢力が衰えていた。歴博甲本の左隻四扇下段に畠山邸らしき邸宅が、また、東博模本には右隻六扇下段に畠山邸(畠山殿)が描かれている。しかし、上杉本には邸宅はなく、跡地が傾城町(はたけ山のつし上ら)になっている(左隻四～五扇中段下部)。天文14年(1545)に畠山^{たわなが}植長が没した後、畠山邸は次第に荒廃して遊廓になってしまったらしい。

今谷明氏によれば、後継に決まった畠山政国が細川晴元に背いたため、京都の邸宅が破却されたのではないかという。

辻子 (図子)

中世・近世の都市において、大路と大路を連絡する小道のこと。屋敷地や空閑地など本来道路がなかったところに引かれた新しい道。突抜とも。

なお、舟木本や林原美術館本には当時の六条三筋町の遊廓が描かれている。上杉本の時代には京都の遊廓は散在していたが、秀吉により二条万里小路に集められ(柳町遊里)、慶長7年(1602)には六条三筋町遊里が作られた。さらに、寛永17年(1640)には島原に移転したので、遊廓(傾城町、遊里)の位置からも制作年代が推定できる。

・三好筑前邸と松永弾正邸

細川晴元は天文18年(1549)、離反した三好長慶に敗北し(江口の戦い)、京都から脱出、同時に將軍義輝と父義晴も近江に逃れた。代わって政治の表舞台に登場したのが三好、松永である。

上杉本には、新興勢力の三好筑前邸と松永弾正邸が書き込まれている。三好邸には永禄4年(1561)に義輝の御成があった際に造られた冠木門が描かれ(前述)、松永邸の門前では小正月の行事である左義長(とんど)が大々的に行われている。

・鴨川、五条橋

鴨川は洛中洛外図には必ず描かれている。

鴨川の橋としては、五条橋、四条橋、三条橋などが描かれるが、初期洛中洛外図の時代には三条橋は必ずしも描かれず、重要な橋ではなかったことがわかる。林原美術館本では五条橋と三条橋が大きく描かれ、四条橋の扱いは小さい。

特に初期洛中洛外図の時代には、河川の氾濫のたびに橋が流されることが多く、橋が流された場合には僧の勧進により再建されることが多かった。

五条橋は清水橋とも呼ばれ、清水寺参詣のための橋であった。

初期洛中洛外図の時代には、五条橋は二本に分かれていた(鴨川の真ん中に中島があった)。中島には安倍晴明ゆかりの法城寺という寺があり、大黒堂とも呼ばれていた。法城寺は「法城山晴明堂心光寺」として今も鴨川の東に存在する。

『ようしゅうふし雍州府志』(京都の地誌書) 黒川道祐著 貞享3年(1686)

「法城寺 五条の橋の東北、中嶋に在り。安倍の晴明、河水はんいつ氾濫を祈る。水、立ちどころに流れ去る。之れに依りて寺を河辺に建て、法城寺と号し、地鎮とす。言うところは、水去りて土と成るの義なり。晴明、死後に、斯の寺に葬る。世に、晴明塚と称す。此の寺、始め真言宗なり。中世、浄土宗となる。弥陀を安置す。改めて心光寺と号し知恩院に属す。爾の後、洪水、数度、寺中に入り、安居を得ず。慶長十二年、住職寿林和尚、寺を三条橋の東に移す。今、存する所の器物に法城寺の字あるもの多し」

『中書家久公御上京日記』（島津家久の上洛日記）天正3年（1577）4月28日
「五条の橋を渡、中嶋有、法城寺といへり、水去て土と成といふ心也」

二本に分かれた五条橋は、初期洛中洛外図のみならず、洛外名所図屏風（太田記念美術館蔵）、東山名所図屏風（国立歴史民俗博物館蔵）、清水寺参詣曼荼羅図（清水寺蔵）などにも描かれている。

五条橋がいつ頃から二本に分かれていたかははっきりしないが、『とはずがたり』巻三に「わづらはしければ都へかへるに、清水の橋の、西の橋のほどにて、
・・」とあり、鎌倉時代後期頃から二本の五条橋があったと考えられる。

初期洛中洛外図の時代の五条橋は今の通りで言えば松原通にあったが、秀吉が方広寺を造ったときに、五条橋を六条坊門通（現在の五条通）に移転させた。林原美術館本など第二定型洛中洛外図の五条橋は、今と同じ位置に一本の橋として描かれる。

・弁慶石

上杉本右隻四扇の鴨川三条付近に一本の松があり、その下で男が弁慶石という石を持ち上げようとしており、そのそば（右隻三扇）には相撲に興じる者もいる。

相国寺の禅僧の瑞溪周鳳が、南禅寺の希臬蔵主の話として弁慶石の由来について述べているところによると、この石は弁慶の霊力が宿っている石で、もと奥州平泉にあり京の五条橋に帰りたいたと告げたので、村送りをして京都まで運ばれたという。ただし、何らかの事情で三条に留まることになったようである。（これとは別の由来を述べた史料もある。）

現在も、三条通に弁慶石町があり、弁慶石も現存している。

『臥雲日件録抜尤』瑞溪周鳳の日記 享徳元年（1452）11月6日

「南禅臬蔵主来ル、話の次ニ云ク、去月廿日比、山階ヨリ弁慶石ヲ送り、南禅門前ニ置ク、蓋シ此ノ石奥州衣河ノ中流ニ在リ、昔弁慶此ノ石ノ上ニ立チテ死ス、此ノ石霊有リ、人ニ告ゲテ京城五条橋ニ到ランコトヲ要ム、此ノ石河ヲ出ル時、水逆流スルハ三日、是ニ由リ郡県通シ相送り、スデニココニ到ルト云フ、石縦横一尺七八寸、色ハ紫、又小石三相加ハル、亦紫色也」

・清水寺

歴博甲本では右隻一扇～二扇、上杉本では右隻一扇、林原美術館本では右隻三扇の、いずれも上部に描かれている。舞台の上には大勢の人が描かれ、今も昔も変わらない風景である。

3作品ともに音羽の滝が三筋の水を落としている。歴博甲本、上杉本にはそれぞれ滝にうたれている二人の男が描かれている。上杉本では滝宮に尻を向けているが、このようなことはないとの説があり、演者も著書の中で永徳の間違ひではないかと書いたのだが、洛中洛外図帖（奈良県立美術館蔵）や洛外名所図屏風（太田記念美術館蔵）などに、滝宮に対して横向きや後ろ向きの人物が描かれている

ことから、当時もこのようなことはあったと見た方が良さそうだ。

しょうこくじ
・相国寺

歴博甲本では左隻一扇最下段に、上杉本では左隻三～四扇の最下段に描かれ、特に上杉本では、室町幕府が定めた京都五山の第二位にふさわしいたらずまいが描かれている。林原美術館本では右隻六扇中段の左側に建物の一部が描かれる。

相国寺の六角七重の大塔

永徳2年(1382) 足利義満が相国寺を創建
応永6年(1399) 義満、六角七重の塔を建立(高さ360尺、109メートル)
応永10年(1403) 焼失
応永11年(1404) 義満が北山に再建を開始(北山大塔)
応永23年(1416) 落雷で再度焼失
足利義持が相国寺に再建(3代目の塔)
文明2年(1470) 雷火により焼失
現在でも、同志社女子大付近に上塔之段町、下塔之段町の地名が残っている。

歴博甲本の左隻は、かつて存在した相国寺の七重の塔から見た景観が描かれているとされる。石田尚豊氏の説で、左隻の一番右下、足元の場所に相国寺の伽藍が描かれており、左隻の地名を地図上に投影させていくとそれが放射状になって、相国寺付近に収束すること、位置上の厳密性が二次元的な平面からの方向感覚でなく、塔の上から見た景観を考えて初めて得られるものであること、などからの推測。この説によれば、文明2年以前にある絵師が塔上からの景観を描いた図を制作していたことになり、この図が洛中洛外図の原型になったと考えられる。

一方、右隻は一定の視点から描かれたものではなく、画面を東西に走る道路に対応した形で東山の各名所が描かれている。村井康彦氏は、右隻と左隻とで作成原理が異なるのは不自然とし、絵巻物以来の鳥瞰図の伝統があるのに実際の高みが必要だったのかと石田氏の見解に異を唱えた。

なお、小島道裕氏は屏風で相国寺が描かれている場所の考察などから、上杉本の方が歴博甲本よりも原型の図に近いとしている。

・金閣寺(鹿苑寺)

金閣は三層から成り、一層目が法水院(寝殿造)、二層目が潮音洞(書院造)、三層目が究竟頂(唐様・禅宗様)と呼ばれている。

歴博甲本、上杉本、林原美術館本を比較すると、上杉本は二層目にも三層目と同じような花頭窓(上部が尖塔アーチ型の窓で、禅宗寺院に用いられる)が描かれるなど、やや不正確である。永徳も筆の誤り(?)ということだろうが、粉本の使用や絵師の勘違い、省略、改変などにより、このようなことが起きることは結構ある。

・北野社と北野経堂

北野社（北野天満宮）と北野経堂（北野経王堂）は、歴博甲本、上杉本、林原美術館本ともに大きく扱われている。北野経堂は足利義満の建立で、中世における北野の中心的な建物であったが、今は存在しない。

歴博甲本、上杉本では、左隻三扇に北野社、四扇に経堂が描かれ、林原美術館本では左隻二扇に北野社、三扇に経堂が描かれる。上杉本では、大勢の僧俗が経堂に集まって法華経一万部千僧供養会が行われている。

三作品ともに経堂のそばに松が描かれるが（歴博甲本、上杉本では柵に囲まれている）、これは影向の松といい、京都に初雪が降った日に天神様が降臨して歌を詠まれるという伝説がある有名な松である。

また、三作品ともに忌明塔が描かれるが、歴博甲本、林原美術館本では五輪塔として描かれ、上杉本では上部の傘が二重になった石塔として描かれる。この忌明塔は、廃仏毀釈により北野天満宮近くの東向観音寺内に移され、菅公御母君伴氏廟として存在しているが、形状は五輪塔であり、上杉本が不正確ということになる。

・比丘尼御所

歴博甲本や上杉本には、曇華院、南御所（大慈院）、法鏡院（法鏡寺）、入江殿（三時知恩寺）、光照院などの尼寺が多く描かれている。これらの尼寺は比丘尼御所と呼ばれ、皇女や公家・将軍の姉妹・息女などが院主となった格式高い寺院である。

米国人研究者のマシュー・P・マッケルウェイ氏は、甲本に比丘尼御所が多く描かれている理由として、これらの尼寺は将軍家との関係が親密であったことを指摘（親密でなかった尼寺は描かれていない）。また、大永5年（1525）に三条家の息女が足利義晴の上臈となっていることから、この関係の人脈で読み解くことができるのではないかとし、甲本の三条家への伝来も説明できるとしている。

・風呂

歴博甲本の左隻五～六扇中段、小川通の上（西側）には、右から極楽寺、誓願寺、革堂（行願寺）、百万遍（知恩寺）の順に寺院が横に（北から南へ）並んでいるが、革堂と百万遍の間に風呂（一条風呂）がある。風呂は公衆浴場であり、今のサウナに相当する蒸し風呂であった。今のような風呂は湯屋と呼ばれていた。

上杉本でも左隻五扇中段に誓願寺、革堂、風呂、百万遍が並んでいる。公家の山科言継がこの「革堂の風呂」へ公家仲間に誘われて行ったという記録がある（『言継卿記』永禄11年（1568）4月23日条）。

林原美術館本には風呂は描かれていないようであり、秀吉が洛中の寺院（浄土宗、日蓮宗、時宗）を強制的に移転させた後の作品であることから、誓願寺は右隻四扇に、百万遍は右隻六扇に描かれている。

・鶯合わせ

鶯合わせは、春に飼っている鶯を持ち寄ってその声の優劣を競う遊びである。

歴博甲本では右隻六扇中段上部にある西条西邸で、鶯合わせが行われている。屋敷の当主は実隆か実隆の子の公条のどちらかであろうが、小島道裕氏は、甲本が制作されたと思われる大永5年（1525）には実隆は70歳であり、描かれている顔は老人ではなく壮年に見えるため、公条だとしている。

上杉本では細川家の分家の典厩邸で行われているが、小島氏は、上杉本が描かれた1565年には典厩邸は細川邸と同様に当主がいなかったはずであり、この描写は不自然だとしている。

・闘鶏（鶏合わせ）

歴博甲本には細川氏関係以外の武家屋敷として斯波邸（武衛）が描かれる（武衛とは、斯波氏の官職兵衛督、兵衛佐の唐名）。館の中で闘鶏（鶏合わせ）が行われている。鶏合わせは陰暦3月3日の節句の行事であった。

上杉本でも斯波邸の門前で行われているが、鶏合わせに興じる人々の中に一人の少年がいる。瀬田勝哉氏は義輝の若き姿を描いたものだとし、旧斯波邸が異時同図的にもう一つの幕府として描かれているとしている。

なお、斯波家は三管領の一つであるが、畠山氏同様、応仁の乱後に衰えた。

斯波邸（武衛）と二条御所

永禄3年（1560）6月に、義輝は仮住まいしていた本覚寺から斯波邸跡に完成した將軍御所に移った。しかし、永禄8年（1565）5月19日に三好・松永により、母慶寿院や弟鹿苑寺周鬻と共にこの場所で非業の死を遂げた（奈良にいた弟一乗院覚慶（後の義昭）は逃亡）。永禄12年（1569）、織田信長は義昭のために、この場所に新たな御所を造った。

なお、後に信長が造り誠仁親王に献上した二条御所（前述）は、別の場所にあった。

・いぬおもうもの犬追物

歴博甲本の左隻一扇中段やや上あたりに、馬に乗り弓を持った武士が犬を追いかけて騎射している。これを犬追物といい、武士の騎射の練習のため鎌倉・室町時代には盛んに行われた。特に細川高国は犬追物を好み、造詣が深かった。

鴨川の支流である高野川の東岸にあった犬追物を行う馬場を描いているとされるが、この場所が下鴨神社ではないかという説もある。この場所は本来右隻に入るべきであるが、小島道裕氏によれば、甲本の発注者である高国が自らの誇るべき業績として幕府に近いところに描かせたものだという。

小谷量子氏は、細川邸にも犬馬場はあったのにこの場所に描くのは不自然であり、犬馬場の形も本来の正方形でなく出入り口もないのは異様で、現実のものではないことを暗示しているとする。そして、高国の辞世の歌「犬追物今一度とおもひこしあらまはただいたづらにこそ」（もう一度犬追物をやりたかったがその計画も空しくなってしまった）に対応して、あの世で行われている犬追物を表現しているとする。

・天道花

天道花とは、陰暦4月8日の灌仏会（花祭）の日に、長い竹竿の先にツツジ、フジ、シクナゲなどの花を付けて軒先高く揚げる行事で、山の神を招いて田畑の守り神になってもらう。高花とも言い、かつては近畿から中四国地方にかけて広く行われていた。

「上杉本」の右隻五扇中段上部の唱門師村には、天道花が三つ飾ってある（唱門師とは、呪術的な芸能に従事していた中世の被差別民）。花だけでなく、笠や瓢箪のようなものも見える。その上の鴨川の対岸にあたる聖護院村にも、天道花がある。

・印地打ち

上杉本の右隻四扇の中段にある曇華院の前で、子供たちが合戦のようなことをしている。これは、端午の節句の日に行われた子供の遊びで、印地あるいは印地打ちといい、二組に分かれて石を投げ合い勝負を競うものである。石を投げるだけでなく、弓や長刀を持ち出すこともあった。

中世には、子供だけでなく若者や大人が盛んに印地打ちに興じ、それが高じて喧嘩になることも多く、印地衆と呼ばれる無頼の集団になることもあった。

・祇園会（祇園御霊会、祇園祭）

祇園会は祇園社（祇園感神院、明治以降八坂神社）の祭礼。ほとんどの洛中洛外図に描かれており、都の華やかさを表す行事として洛中洛外図には欠かせないものになっていたことがわかる。

作品により異なるが、長刀鉾、船鉾、函谷鉾、月鉾、蟻螂山などの山鉾巡行が描かれ、特に上杉本では8基の山鉾が進んでおり、その華やかさが顕著である。山鉾巡行のコースは作品によりかなり異なっている。

歴博甲本、上杉本ともに、神輿渡御のための四条仮橋が四条橋の横に描かれている。山鉾巡行はあくまで祇園社の氏子が出す出し物であり、本来の祭の主役は神輿渡御である。歴博甲本、上杉本などでは四条河原等で土下座して神輿を拝んでいる人物が描かれており、中世の人々の信仰心の厚さをうかがうことができる。

林原美術館本では四条通付近の山鉾巡行のほか、神輿の二条城前渡御の様子が描かれている（前述）。

・大文字の送り火

意外に思われるかもしれないが、初期洛中洛外図のすべてと初期の第二定型洛中洛外図には大文字の送り火がまったく描かれておらず、17世紀半ば頃の制作と思われる八曲屏風の洛外図、及び中井家本洛外図に初めて登場する。

大文字送り火の起源としては、①弘法大師空海が始めた、②室町時代中期に足利義政が息子義尚の冥福を祈るために始めた、③江戸時代初期に三藐院近衛信尹が始めた、などの説がある。洛中洛外図に描かれていないからといってその時代にそれがなかったとは断言できないが、①は俗説と言わざるを得ず、②の説は根

拠に乏しく、最も妥当と思われるのが③の説である。

近衛信尹は近衛前久の子で三藐院は法号、本阿弥光悦・松花堂昭乗とともに寛永の三筆と呼ばれた。寛文2年(1662)刊行の『案内者』には、「大文字は三藐院殿の筆画にてきり石をたてたりといふ」とある。著者の中川喜雲は寛永13年(1636)生まれであり、慶長19年(1614)に没した近衛信尹と年代的にあまり離れていないので、『案内者』の内容はある程度信頼できると思われる。

官人であった舟橋秀賢の『慶長日件録』慶長8年(1603)7月16日条には、鴨川で送り火を見物した旨が記載されているが、これが大文字の送り火かどうかは不明(妙法の可能性もありそう)。

・川の上にあった家

歴博甲本左隻三扇中段左の、水落地蔵堂(水落寺)の門前の小川に架かる橋の両側を見ると、小川の上に川を跨いで町屋(商家)がある。人口が増え、密集度が高まって川の上にまで家が建てられるようになったらしく、水面上の空間の有効利用とも言うべきものか。

上杉本でも左隻四扇中段右の水落地蔵堂のあたりで、小川の上に建てられた家を何軒も確認することができるが、林原美術館本には確認できない。

・頭上運搬

歴博甲本、上杉本、林原美術館本などに、頭の上に物を載せて運ぶ女性が多数描かれている。今の日本ではなかなか見ることのできない光景であるが、頭の上に物を載せて運ぶ方法は、男女を問わず当時の手軽な運搬方法であった。

6 洛中洛外図についての書籍(一部のみ、太字は特におすすめのもの)

『洛中洛外 環境文化の中世史』高橋康夫、平凡社、1988

『上杉本洛中洛外図屏風を見る』小澤弘・川嶋将生、河出書房新社、1994

『謎解き 洛中洛外図』黒田日出男、岩波新書、1996

『京都・一五四七年 上杉本洛中洛外図の謎を解く』今谷明、平凡社ライブラリー、2003

『増補 洛中洛外の群像 失われた中世京都へ』瀬田勝哉、平凡社ライブラリー、2009

『描かれた戦国の京都 洛中洛外図屏風を読む』小島道裕、吉川弘文館、2009

『洛中洛外図の世界 一室町時代の京都を見る』井上知明、鳥影社、2014

『洛中洛外図屏風 つくられた〈京都〉を読み解く』小島道裕、吉川弘文館、2016

『歴博甲本洛中洛外図屏風の研究』小谷量子、勉誠出版、2020

『上杉本洛中洛外図屏風の研究 桑実寺縁起絵巻と共に』小谷量子、勉誠出版、

歴博甲本、上杉本、舟木本については、下記のとおりこの三作品の全画面を収載した高価な大型本が刊行されている（岡山県立図書館にあり）。

『洛中洛外図大観』（全三冊）小学館、1987

『〔国宝〕上杉家本洛中洛外図大観』小学館、2001（上杉本のための改訂版）

なお、国立歴史民俗博物館所有の洛中洛外図（歴博甲本、歴博乙本など）については、同館のホームページから全画面の詳細な画像を見ることができる。

（参考）

初期洛中洛外図の時代の関係者生没年

足利義澄（11代将軍）	1480～1511	（在職：1494～1508）
足利義稹（10代将軍、復職）	1466～1521	（在職：1508～1521）
足利義晴（12代将軍）	1511～1550	（在職：1521～1546）
足利義輝（13代将軍）	1536～1565	（在職：1546～1565）

細川高国	1484～1531
細川晴元	1514～1563

三好長慶	1522～1564
松永久秀	1510～1577

織田信長	1534～1582
上杉謙信	1530～1578

三条西実隆	1455～1537
三条西公条	1487～1563

土佐光信	1430頃～1522頃
土佐光茂（光信の子）	? ～ ?

狩野元信	1476～1559
狩野松栄（直信）	1519～1592
狩野永徳（州信）	1543～1590



清水寺

林原美術館本 右隻二扇~三扇

豊国社

方広寺

四条橋

五条橋

六角堂

因幡堂

六条三筋町

上杉本 右隻二扇

八坂の塔

清水寺

祇園社

四条橋

五条橋

万寿寺

因幡堂

悲田寺

長講堂

本国寺

